

長野県産ツツジ属の一同定法

横 内 文 人

F. Yokouchi: Identification of Rhododendron in Nagano Prefecture

1. はじめに

我々が植物の名前を決定するには、普通は検索表を利用したり、図鑑等の絵や写真等を利用する。検索表は二又（または三又）する検索コースを進んで行き、形質をだんだんにしぼって行くと、最後に該当する植物名に行き当たるしくみになっている。しかし我々が検索表を利用するとき、手持ちの標本は全ての検索コース上の形質を持っているわけではない。そのため検索途上で投げ出したり、とび越えて検索して、植物名が判明したとしても分布や環境等のちがいに気づいて、再び検索しなおすことが時々ある。それは全ての検索形質を備えているような標本を要求することが、無理であって、欠ける形質のある標本の方が普通であるからである。

私は今まで長野県の植生の研究中、主にアカマツ群落、ヒノキ群落の種組成の調査報告に当たって来た。これらの針葉樹類にはツツジ科植物の結びつきの強いことが知られている。今回内地留学に際し、特に長野県産ツツジ属の分類と分布に主題をおき、とりまとめをしたので報告したい。

報告に先立ち、昭和55年度内地留学生として、貴重な機会を与えられた長野県教育委員会、留学中、御指導いただいた国立科学博物館植物研究部第1研究室長、金井弘夫博士には厚く御礼申し上げます。また留学のため便宜を与えられた松本市立清水小学校、赤津寛校長先生を始めとする諸先生方にも御礼申し上げます。

2. 分類

(1) 長野県産ツツジ属の種類

長野県産のツツジ属には、下記の20種が知られている。学名並びに種の取り方は大井（1975）によったが、これは種の取り上げ方が比較的大きいことと、種毎に特徴が明記されているためである。

- | | |
|--------------------------------|-----------|
| 1. <i>Rhododendron keiskei</i> | ヒカゲツツジ |
| 2. <i>R. brachycarpum</i> | ハクサンシャクナゲ |
| 3. <i>R. metternichii</i> | ツクシシャクナゲ |
| 4. <i>R. aureum</i> | キバナシャクナゲ |
| 5. <i>R. semibarbatum</i> | バイカツツジ |
| 6. <i>R. nipponicum</i> | オオバツツジ |
| 7. <i>R. tsusiophyllum</i> | ハコネコメツツジ |

- | | |
|-----------------------------|------------|
| 8. <i>R. tschonoskii</i> | コメツツジ |
| 9. <i>R. serpyllifolium</i> | ウンゼンツツジ |
| 10. <i>R. indicum</i> | サツキツツジ |
| 11. <i>R. kaempferi</i> | ヤマツツジ |
| 12. <i>R. macrosepalum</i> | モチツツジ |
| 13. <i>R. dilatatum</i> | ミツバツツジ |
| 14. <i>R. nudipes</i> | サイコクミツバツツジ |
| 15. <i>R. reticulatum</i> | コバノミツバツツジ |
| 16. <i>R. wadanum</i> | トウゴクミツバツツジ |
| 17. <i>R. quinquefolium</i> | ゴヨウツツジ |
| 18. <i>R. pentaphyllum</i> | アケボノツツジ |
| 19. <i>R. albrechtii</i> | ムラサキヤシオ |
| 20. <i>R. japonicum</i> | レンゲツツジ |

(2) 同定表作成の手順

金井（1978）は、ツリガネニンジン属において同定表を作成している。それによると

1. 検索表の各選択枝に表われる同定形質を一つ一つ分離する。
2. いろいろな選択枝から分離された形質のうち、同じ見出しにまとめられるものを集め、一つの見出しの中をきれいに排反するいくつかの状態にする。
3. このように整理された同定用形質について、すべてのタクソンにおける状態を記録する。

同定表は一方の軸に形質を、他の軸に植物名を列記し、その交点に形質の状態の存否を示す一覧表とする。

同定表作成の材料として大井（1975）の日本植物誌を用いた。ツツジ属の検索表、記相文より、33個の形質をぬき出した。各形質の中は相反する事象に区分した。その折、長さや個数のように数量で表現されるものは全域を見わたして、比較的不連続の多い所で分割した。また形のように言葉で表現されるものは近似のものをまとめ、判別しやすい表現で区分するように努めた。また「やや」、「往々」、「時々」のように相対的な表現は、通常からはずれた状態であるので切り捨てまたは整理した。

このようにして同定表を作成したところ、121個の空白部ができた。それらは北村（1971）で補ったが残り90の不足は国立科学博物館（TNS）の所蔵標本を検討してうめ合わせた。そして表1を得た。

表 1. 長野県産ツツジ属の同定表

分 類		ヤマツツジ亜属																			
		ヤマツツジ節								オンツツジ節								レンゲツツジ節			
形 質	Rhododendron	ヒカゲツツジ 亜属 シャクナゲ 属 バイカツツジ 亜属 カオハツツジ 亜属 オオハシツツジ 亜属 コメツツジ 亜属																			
		1. R. keiskei ヒカゲツツジ	2. R. brachycarpum ハクサンシャクナゲ	3. R. metternichii ツクシシャクナゲ	4. R. aureum キハナシャクナゲ	5. R. semibarbatum バイカツツジ	6. R. nipponicum オオハシツツジ	7. R. tsusii ハコメツツジ	8. R. tschonoskii コメツツジ	9. R. serpyllifolium ワンゼンツツジ	10. R. indicum サツキツツジ	11. R. kaempferi ヤマツツジ	12. R. macrosepalum モチツツジ	13. R. dilatatum ミツバツツジ	14. R. nudipes サイコクミツバツツジ	15. R. reticulatum コバノミツバツツジ	16. R. wadanum トウゴクミツバツツジ	17. R. quinquefolium ゴヨウツツジ	18. R. pentaphyllum アケボノツツジ	19. R. albrechtii ムラサキヤシオ	20. R. japonicum レンゲツツジ
幹・枝	樹高 (m)	1 2 6																			
	毛	あり 始めなし																			
	葉序	互生																			
	葉質	革質でない																			
	葉の形	披針形 だ円形 卵形 菱形																			
	葉の先	鋭形 鈍・円形 鋭形 鈍形																			
	基部	鋭形 鈍形 円心形 微鈍楔形																			
	葉身の毛	あり ない																			
	葉柄の長さ (mm)	0 2 5 5																			
	葉柄の毛	あり ない																			
花	長さ (mm)	3 8 8																			
	巾 (cm)	1.5 2.5 2.5																			
	小梗の長さ (cm)	0.5 1.0 1.5 1.5																			
	がくの形	皿状 卵形 だ円形 皮針形																			
	がくの毛	あり ない																			
	花序	散総状 単一																			

分 類		ヒカゲツツシ 亜属	シャクナゲ 属	ハイカゲツツシ 亜属	オホバコメツツシ 亜属	ハコメツツシ 亜属	ヤマツツシ亜属														
形 質	Rhododendron	ヤマツツシ節												オンツツシ節				レンゲツツシ節			
		1. R. keiskei ヒカゲツツシ	2. R. brachycarpum ハクサンシャクナゲ	3. R. metternichii ツクシシャクナゲ	4. R. aureum キバナシャクナゲ	5. R. semibarbatum ハイカゲツツシ	6. R. nipponicum オホバコメツツシ	7. R. tsusitophyllum ハコメツツシ	8. R. ischonokii コメツツシ	9. R. serpyllifolium ウンゼンツツシ	10. R. indicum サツキツツシ	11. R. kaempferi ヤマツツシ	12. R. macrosepalum モチツツシ	13. R. dilatatum ミツバツツシ	14. R. nudipes サイコクミツバツツシ	15. R. reticulatum コバノミツバツツシ	16. R. wadanum トウゴクミツバツツシ	17. R. quinquefolium ゴヨウツツシ	18. R. pentaphyllum アケボノツツシ	19. R. albrechtii ムラサキヤシオ	20. R. japonicum レンゲツツシ
花	花冠の形	漏斗状	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	大きさ (cm)	～1																			
	1.5～2.0									○											
	2.5～4.0	○	○		○						○			○	○		○		○		
	4～6			○							○									○	
	裂片数	4						○	○											○	
	5	○	○			○			○										○		
	7			○																	
	裂片の毛	あ					○	○	○									○	○	○	○
	る	○	○	○	○					○			○	○	○	○	○				
	ない																				
	雄ずい (本)	4							○												
	5					○			○	○	○	○	○							○	
	10	○	○		○																
	14			○													○	○			
花系の毛	あ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					○	○	○	○	
る													○		○						
ない																					
花柱の毛	あ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	○	○	
る													○	○	○						
ない																					
子房の毛	あ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					○	○	○	○	
る																					
ない																					
花柱の長さ (cm)	～1.0							○													
～1.5			○			○															
～2.4					○				○								○	○			
2.5～	○		○							○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	
花数	1					○							○	○	○	○	○	○	○	○	
2～3	○				○			○					○	○	○	○	○	○	○	○	
4～5	○	○			○														○	○	
6～10		○	○			○													○	○	
11～15		○	○																○	○	
花色	淡黄～淡緑	○			○				○	○											
白(～淡紅)			○	○		○	○	○										○			
紅 紫 色										○			○	○	○	○	○		○		
桃 色																					
橙 ～ 赤											○							○	○		
花期 (月)	4～5	○		○					○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	
6～8		○	○	○	○	○	○	○		○									○	○	
萌	形	円 柱 形	○	○	○									○			○	○	○	○	○
		卵～だ円形				○		○		○					○				○	○	○
		球 形																			
		円 錐 形																			
	長さ (cm)	0.2～0.5						○	○	○										○	
	0.7～1														○	○					
	～1.5	○	○		○													○	○	○	
～2.5		○	○									○	○								
巾 (mm)	2～4	○							○	○			○	○							
～7			○		○	○				○	○								○	○	
7～				○																	
毛	あ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
る																					
ない																					

(3) 同定表の使い方

表1の同定表の使い方は、白紙を縦にあって、左欄の同定形質を読みながら、標本をチェックして該当していれば○印、していなければ×印をつけて行く。形質項目について標本に不足があったり、不明なときは、空欄にしておく。こうして作られた○印のパターンを記入した形を横へずらしながら、表1と比較し、一致したものがあれば、記相文や図を見て、確認する。一致するものがなくても、2〜3種類にしばることは可能である。

表1を使用して、国立科学博物館の末整理標本の同定してみた。その結果、約8割は同定できた。残り約2割は、雑種であったり、花や果実のない標本等であった。標本の採取時期によって葉の大きさ等では合致しないことがあった。また標本について同定を試みるときは、樹高は不要であった。

なお他の形質についても検討し、表1に加除すべきものがあろうと思われるが、それらは今後の課題である。

リンドウ類の分類体系

豊 国 秀 夫

H. Toyokuni: On the New System of *Gentiana*, s. lat. (Gentianaceae-Gentianeae-Gentianinae)

日本で一般的にリンドウと名がついている自生植物は、シソ科のムシャリンドウを除くと、リンドウ科 — リンドウ連 — リンドウ亜連に属している。

植物分類学の父と言われる、スウェーデンのLinnéの設立した属には、センブリ属 (*Swertia*) のように比較的 content の均質な属もあったが、リンドウ属 (*Gentiana*) の方は、多くの異分子の集合体であった。そのために、長い間、リンドウ類の分類と取り組んだ人々を悩まして来た。例えば、Linnéのリンドウ属の中に入れていた、オノエリンドウやチシマリンドウなどの属する、いわゆる *Gentianella* の群と、リンドウやエゾリンドウの属する *Gentiana* の群とでは、花の中をよく見ないで、花を横から見たり、腊葉標本になったものをそのまま見ると、一見非常に類似しているように見える。しかし、かつて、チエコのSchustler (1923) が、両群の共通点は、合弁花冠であるというだけであると言ったように、もっとも、この言い方は少し極端すぎるかも知れないが、とにかく花の構造は、両群では全く異なっている。古い事であるが、1936年に、スウェーデンのウプサラ大学のH. Smith は、この事実に気づき、18世紀の終りに、Moench, Borckhausen, F. W. Schmidt などによって、一度は細分化されたものの、長い間認められなかった広義のリンドウ属の細分化に着手した。彼は、広義のリンドウ属から、チシマリンドウ属とメガコドン属を分け、さらに1945

年、リンドウ属とチシマリンドウ属の相異点を簡条書きにして、判り易く示した。日本では、矢田部良吉、松村任三両博士が、ヨーロッパの植物分類学を日本にとり入れて以来、つい最近まで、このH. Smithの考えは支持されず、日本各地で次々と発見されたリンドウ類は、みなリンドウ属に入れられていった。その結果、リンドウと比較的花の構造の近い、ツルリンドウは別属にされていたにもかかわらず、花の構造の全く異なる、オノエリンドウ、タカネリンドウ、サンプクリンドウなどみなリンドウ属として報告されていった。Maximowicz は1859年に、ホソバノツルリンドウは、ツルリンドウと全く異なるとして、ホソバノツルリンドウ属 (*Pterygocalyx*) を設立したが、19世紀の終りから20世紀に入ったばかりの時代の、日本の植物分類学者達は、外観にのみ重きを置き、茎がつる性であるという点だけで、ホソバノツルリンドウをツルリンドウ属に入れて扱っていた。

1963年、筆者が、日本のリンドウ科を整理して以来、次第に均質化された小さい属が、リンドウ科でも認められるようになって来た。しかし、未だ、大きい属の考えを取りいれている人もすくなくない。とにかく、植物学的に見た属の尺度を再検討することが必要であった。だから本稿の表題中でもリンドウ属としないで、より一般的な意味での、リンドウ類として、チシマリンドウ属、タカネリンドウ属、